

# 伊藤漱平と『紅樓夢』

齋藤祐一

## Ito Souhei and *A Dream of Red Mansions*

Saito Yuichi

**Abstract:** In 1921, Ryunosuke Akutagawa travelled around China for four months, during which he met with Hu Shi in Beijing. At that time, Hu Shi had just published a manuscript entitled "textual research on A Dream of Red Mansions" (first edition). The publication of this manuscript became a turning point for Hu Shi to study A Dream of Red Mansions. On the other hand, during Akutagawa's visit to China, Lu Xun translated Akutagawa's representative works Nose and Rashomon. Akutagawa's experience in China was later written and published as Travel to China (November 3, 1925). On October 10, 1925, about a month before the publication, the Palace Museum in Beijing was officially opened. Ito (1925–2009) was born on October 20 between the two events. Ito's birth is closely related to Lu Xun and Hu Shi, and the opening of the Palace Museum. This makes him devote his whole life to the study of Chinese literature, especially the study of A Dream of Red Mansions, and leave many excellent achievements for future generations.

**Key words:** Ito Souhei ; A Dream of Red Mansion; Lu Xun; Hu Shi

### 1. 生誕の記憶—魯迅と胡適—

1921年（大正10年）3月、芥川龍之介は大阪毎日新聞社の海外視察員として念願の中国を訪れ、およそ4ヶ月にわたり各地を游歴した。それからちょうど100年になる。

3月の末、上海に旅装をといたとき、北京では、胡適が「紅樓夢考證」（初稿）を書き終えたところであった。新紅学の始まりを告げたこの論文

が、汪原放が標点を施した『紅樓夢』の巻首を飾り、上海の亞東図書館から出版されたのは5月のことである。その翌月、北京で芥川と2度にわたり会見した胡適は、「歳の同じ「日本で最も年少の文人の一人」である芥川の印象を、「談話（英語による）も相当見識のあるもの」（『胡適全集』29）と日記に書きとめている。

同じく北京にいた魯迅は、芥川の来

游に合わせ、「鼻」と「羅生門」の中國語訳を『晨報』へ発表した。魯迅訳の「羅生門」を読んだ芥川は、自らの心地がはっきりと現れていることを喜んだ。かつ驚きもしたようだが、二人が面会することはなかった。

芥川の中国体験は、帰国後に「上海游記」「江南游記」「長江游記」「北京日記抄」として新聞誌上などに発表され、後にこの4篇に「雜信一束」を加え、『支那游記』（1925年11月3日、改造社）として刊行された。翌年の4月、これを北京の東亜公司で買った魯迅は、実によい文章だと賞賛し、芥川のような誠実な友人が我々を刺戟してくれることが必要だと評した。一方で魯迅は、中国文学者の増田涉に対し、『支那游記』が中国で評判が悪かったのは、最初に抄訳を発表した翻訳者（夏丐尊）のやり方がよくなかったからだとも述べている。

『支那游記』が刊行される2週間前、三河の知多湾をのぞむ小さな町で、一人の男児が誕生した。後年、増田涉のもとで魯迅について学び、また胡適らに連なり『紅樓夢』の研究者となる伊藤漱平である。その生誕の記憶のなかに、すでに魯迅と胡適が紛れ込んでいたかのように、生涯にわたり中国文学研究の道を歩み、大きな足跡を残すことになる。

## 2. 文武双絶の修学時代

1925年（大正14年）10月20日、愛知県碧海郡新川町（現碧南市）に生まれた伊藤漱平は、右文の風あふれる家庭に育ち、新川高等尋常小学校から刈

谷中学へと進学する。英國の名門イートン・カレッジをモデルとした刈谷中学では、サッカーが校技であった。伊藤もその校技に夢中になった。3年からア式蹴球部（サッカー部）のレギュラーとなり、5年のときには、主将として全国大会で3位に輝いた。サッカー熱は高等学校へ入ってからも続いたが、その頑健な体力と強靭な精神力は、中高時代のサッカーにより増幅され、後の学究生活を支えていくことになる。

一方で中学時代の伊藤は、友人らと同人誌を作つて回覧するなど、早くから才筆をふるうような少年でもあった。自ら「埋れ木」と名づけた雑誌の巻頭には、

俺のアビリティ 剃刀じゃない  
だが磨けば切れる名刀  
ただ古道具屋の店奥に  
ほこりをかむって眠っているだけだ  
いつかは光る時が来る  
いつかは切れる時が来る  
仙台名物埋れ木細工のように

という詩を寄せている。後に乱麻を断つがごとく、鋭く文学研究に切り込むことになる伊藤の快刀は、すでに中学時代から、周到に準備されていたのである。

中国文学を志したのも、このころであった。戦況が険しくなり、教室は理科へ進むのが当然という空気に覆われていた。文科に進む者は、という教師の問いに、生徒らが一齊に沈黙するなか、一人敢然と手をあげたのが伊藤であった。この戦争は、やがて日本の敗北に終わる。そのとき日本に必要なの

は、中国と友好を結ぶことだ。俺は文科へ進み、中国文学をやる——。

時流を見きわめ、自らの素志を貫いた伊藤は、第一高等学校文科四類（古典選修）へ進み、1945年（昭和20年）4月、東京帝国大学文学部支那哲文学科へ入学する。だが、その5日後には休学し、盛岡への現役入営を余儀なくされる。敗戦により帰郷したのが9月、復学してようやく学問へ専心できたのは、翌年4月のことであった。

当時の教授陣には、北京留学中に『紅樓夢』研究を志し、程偉元による再印本である程乙本『紅樓夢』を初めて日本に将来した倉石武四郎教授、後に百二十回の『紅樓夢』（岩波文庫）を初めて完訳した松枝茂夫助教授、さらに上海で半年にわたり魯迅の教えを受け、魯迅を終生師と仰いだ増田涉講師らがいた。

作家志望の伊藤は、卒業論文を『紅樓夢』の作者曹雪芹論にするか、魯迅論にするかで思い悩んだ。結局、魯迅に関する文献資料が思うように入手できないという理由から、いきおい『紅樓夢』を選ぶことになり、『紅樓夢』は曹雪芹の自伝であると唱えた胡適の「紅樓夢考證」を批判する卒論を書き上げた。魯迅が「『紅樓夢』の出現以後、伝統的な考え方や描き方はすっかり打破された」（『中国小説の歴史的変遷』）と評したこの中国古典小説的一大巨編が、こうして終生の研究テーマとなったのである。

### 3. 紅学に屹立する文人学者

1949年（昭和24年）3月、東京大

学を卒業して大学院へ進み、8月には北海道大学へ助手として赴任することになる。助手時代、卒論をもとにまとめた「曹霑と高鶚に関する試論」（『北海道大学外国語外国文学研究』第2号、1954年）を発表、これが公刊された最初の研究論文であった。爾来、およそ半世紀にわたり、単著・主編11冊、翻訳26冊、論文およそ60本という瞠目すべき研究成果を相次いで世に問うことになる。



講義中の伊藤漱平教授（撮影：張仕英）

この間、島根大学助教授、大阪市立大学助教授、北海道大学教授、東京大学教授、二松學舎大学教授および学長などを務め、謹厳で包容力のある人格者として教育や大学行政に携わり、多くの後身を育てた。また、日本中国学会理事長や中国語学会理事などの要職を歴任し、学界運営においても手腕を発揮した。

その影響力は国内にとどまらず、国際会議などで学術交流を主導したほか、とりわけ漢詩や書をよくする文人学者として、中国の学者と交誼を深め、紅学を代表する一代の碩学として敬仰された。晩年に至るも、「枕石

漱流」のごとき隠遁とは無縁であり、旺盛な学究生活を続けた伊藤であったが、喜寿を前にして病を得る。学界の広く惜悼するなか、薬石効なく泉下に瞑したのは、2009年（平成21年）12月21日のことである。享年85、文人学者として、真摯に学問と向き合った生涯であった。

その業績は、『伊藤漱平著作集』全5巻（汲古書院、2005-10年）、計2,281頁に集約されている。第一巻から第三巻までが紅樓夢編であり、第四巻は中国近世文学編、第五巻は中国近現代文学・日本文学編から成る。圧巻である第一巻には版本論（書誌学・文献学）的研究、第二巻には作家論・作品論的研究、第三巻には読者論、比較文化・比較文学的研究に関わる論文等が収めてあり、こうした構成からも、伊藤の精緻を極めた文献考証学的な分析が、いかに多角的・総合的になされたかが窺える。

研究業績と並び、畢生の偉業として、ひときわ異彩を放つのが『紅樓夢』の翻訳である。中国古典文学全集『紅樓夢』全3巻（平凡社、1958-60年）が最初の完訳であり、その改訳版として、さらに完成度を高めたのが中国古典文学大系『紅樓夢』全3巻（平凡社、1969-70年）であった。加えて平凡社ライブラリー『紅樓夢』全12巻（平凡社、1996-97年）が訳業の掉尾を飾る。

かつて、例えば『源氏物語』の著名な研究者が、同時にすぐれた全訳を一再ならずなし得たという話を聞かない。『紅樓夢』研究の第一人者であ

り、かつ元作家志望の秀でた美文家にして、初めてなし得た壯挙であった。かくして、流麗な文体と詳細な訳注・解説を備えた伊藤版『紅樓夢』は、多くの読者を壮麗な红楼の夢世界へと誘うことになる。

#### 4. 世界の至宝文学としての『紅樓夢』

初めてとなる中国の旅で、上海や江南地方、長江流域などを訪れた芥川であるが、とりわけ魅了されたのが北京であった。室生犀星へ寄せた書信にも、「東京に住む能はざるも北京に住まば本望なり」と記したほどである。

芥川が紫禁城を訪れたとき、この地上の天宮の内廷には、未だ清朝の皇帝溥儀が居寓しており、わずかに文華殿と武英殿のみが、古物陳列所として開放されていた。芥川は、すでに上海で鄭孝胥と会見していた。後にこの人物は、紫禁城からの退宮を余儀なくされた溥儀のもとで、満州国の國務總理となる。むろん、芥川には夢さら知るよしもなかった。皇帝権力の象徴として、人民を畏伏させてきた紫禁城の印象を、芥川はただ一行、「紫禁城。こは夢魔のみ。夜天よりも厖大なる夢魔のみ」（『支那游記』）と記している。

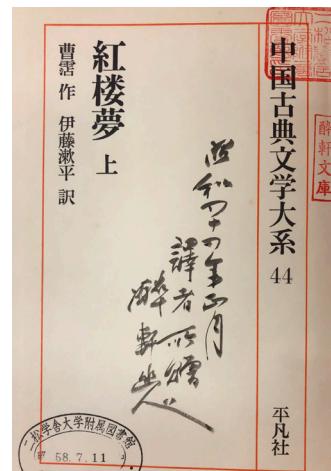
その紫禁城が1925年（民国14年）10月10日、辛亥革命の記念日に合わせ、故宮博物院として開幕する日を迎えた。近代中国史を彩る盛挙であった。かつて曹雪芹の一族を没落に追いやった雍正帝など、歴代皇帝の賞翫した文物財宝は、「ただ古道具屋の店奥に／ほこりをかむって眠って」いたような

状態から解放され、世界の至宝として「光る時」を迎えたのである。奇しくもその10日後に生まれたのが伊藤であった。

同じように「ほこりをかむって眠つて」いた自らの名刀を、「光る時」そして「切れる時」を期して磨き上げ、満を持して『紅樓夢』の研究に切り込んだ伊藤は、「21世紀には『紅樓夢』が世界文学中の宝の一つとして、その独自性を發揮し、特別な地位を得る」

（『紅樓夢学刊』1997年）と見通していた。半生をかけて、その実現に導いた最大の功労者の一人となったのである。

故宮博物院の誕生もまた、伊藤の生誕の記憶のなかに、すでにすり込まれていたのであろう。



伊藤漱平が橋川時雄（中国文学者）へ贈った中国古典文学大系『紅樓夢』上（平凡社、1969年）／二松學舎大学附属図書館・醉軒文庫蔵

（勤務先：アジア文化総合研究所）